

独立行政法人国際協力機構理事長賞

今、私にできること

学校法人松尾学園弘学館高等学校 2年

眞崎 由梨佳

17歳。日本在住。猫とアニメが好きな高校生。それが私。毎日、ご飯を食べ、学校に行き、一日が終わり、眠くなったらベッドで眠る……。何の不思議もない。それは当たり前のことだと思っていた。今年の夏、日本の次世代リーダー養成塾に参加するまでは。

リーダー塾では、講師の先生に紛争地域の現状をつぶさに教えられ、仲間と日夜とことん議論した。混沌として曖昧な世界のこと、そしてそこに住まう人々のこと。衝撃だった。日本の私の日常は当たり前なことなんかではない。とてもありがたいことなんだと心の底から実感した。だからこそ今、何かをしなければ……。私にできることは何だろう。行動を起こしたい気持ちばかりが先に立つものの、具体的に何をどうしていいのかわからない。高校生の私が今、紛争の起きている国に直接、支援に行くことは難しい。焦っていた。そんな時、市立図書館で一枚のパンフレットを目にした。

「絵本を届ける運動」これだ！と思った。今すぐ、私にできることがそこにあった。それは、あるボランティア協会が主催するもので、絵本の日本語の上に支援の必要な国の言葉のシールを貼って、子供たちに送るものだ。

申し込んで数日後、絵本セットが届いた。行先は、ミャンマー難民キャンプ。そこは軍事政権の迫害から逃れた人々が何十年も不自由な暮らしを強いられている。そしてそこで生まれ育った子供たちは祖国を知らない。教育の施設も不十分で、物資も少ないのがミャンマー難民キャンプの現状だ。そこにいる子供たちに私が作業した絵本が届く。子供たちはみんな集まって目をきらきら輝かせて絵本に見入る。なんて素敵な光景だろう！私は想像を膨らませながら早速、作業にかかった。シールは、はみ出さないようにできるだけきれいに切り取らなければ。そして順番を貼り間違えないように慎重に、慎重に……。1ページずつ仕上げながら、私はミャンマーの子供たちの笑顔や歓声をひたすら思い描いた。心がほかほか温かくなった。

ところが、最後のページに取りかかった時、私は複雑な気持ちになった。絵本の中の男子は語る。「ちきゅうのうえにくにがある。くにのなかにまちがある。まちがあって、みちがあって……」と「ぼく」までズームインした光景が、再びズームアウトされ、眠りにつこうとするシーンで最後に彼は言うのだ。「ここがぼくのいるところ」と。

確かに素敵な絵本だ。幸せな日常を送る私たち目線では。でも難民キャンプに住まう子たちにとってはどうなのだろう。絵本に描かれた見たことのない公園や街並み、アイスクリーム、ふかふかのベッド・・・きつと目を丸くして驚き、興味をもつことだろう。でも最後のページをめくり「ここがぼくのいるところ」という一言に祖国を知らない彼らは、何を思うのだろうか・・・。心が痛んだ。

国際理解、国際協力は「私たち目線」でいるうちは本物ではないと思う。「心」だ。相手の立場に寄り添う心。相手の思いに本気で向き合う心。そこから最初の一步は始まるものだと思う。国際問題は根深いものがあり、紛争や混乱が一朝一夕に解決するわけではない。でも「心」をもって「心」に接すれば、そこに住まう人々の明日に少しでもつながるのではないだろうか。

今、私はそんな「心」を持った仲間たちと古着集めを呼びかけて海外に送ったり、担任の先生の助言を受けて、卒業生の運動靴を集めたりして、少しずつ行動を起こしているところだ。

私が贈った絵本を手にしたミャンマー難民キャンプの子供たちが、そして世界中の子供たちが「ここがぼくのいるところ」と心から思える日が来ることを願って、今、私ができることから始めていきたい。